

高等学校 国語科学習指導案

授業者 重永和馬

- 日 時 平成31年1月28日(月) 第5限
- 場 所 多目的教室
- 学年・組 高等学校I年3組(男子22名と女子17名)
- 教 材 「木曾の最期」(東京書籍 『国語総合 古典編』)
- 目 標
- 1、自ら学習課題を立て解決に向けて考えることを通じて、文章理解を深め、人間観を広げる。
 - 2、書かれている人物の言動をもとに、書かれていない心情を想像しながら、読む。
(読むことウ)
 - 3、音読を繰り返すことで、古典の言語事項について慣れ、理解を深める。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ア(イ))

指導計画

展開	学習活動
導入	・紹介プリントを読む。 ・現代語訳の範読。 ・学習課題作り。
展開	場面1前半(義仲と兼平の再会)を読む
	・義仲が北国に逃げなかったのは、なぜ？ ・二人が再会した後、二人で逃げなかったのは、なぜ？
	場面1後半(300騎から5騎に減るまでの激戦)を読む
	・多勢に無勢なのに最後の戦をしたがるのは、なぜ？ ・一条次郎たちが「我討つとらん」と前に進むのは、なぜ？
	場面2(巴が去る)を読む
・義仲が「疾し」を繰り返し、しかも語順が乱れていることから想像できる心情は、どのようなもの？ ・巴が去って行くときの心情は、どのようなもの？ ・巴が単に去るのではなく、敵将を討ち取って去って行くのは、なぜ？	
	場面3前半(義仲と兼平のやりとり)を読む 【本時】

	<ul style="list-style-type: none"> ・義仲が「鎧が重くなった」ということから想像できる心情は、どのようなもの？ ・一緒に死にたいと思っていた義仲が、自害の勧めを受け入れるのは、なぜか？
	場面3後半（義仲と兼平の最期）を読む
	<ul style="list-style-type: none"> ・義仲が振り向いたことから想像できる心情は、どのようなもの？ ・義仲が討ち取られたことを聞いた兼平の心情は、どのようなもの？ ・作者が、兼平と比べて、義仲が武勇の人ではないように描いているのは、なぜ？
まとめ	・まとめの学習課題作り。 ・文法学習

単元観

【教材について】

「木曾の最期」は高校1年生古典の定番教材である。そのため、先行研究・実践は多く行われている。

一文が簡潔であり音読しやすい文章である。また、描かれている内容を明瞭にイメージすることができる。そのため、音読は何度も行いたい。そのことを通じて、古典の言語事項に慣れてくれればと思う。

主要登場人物（義仲・兼平・巴）は三者三様に個性的で魅力がある。作者（授業展開上、一人の作者が書いた作品として）は淡々とした書きぶりであり、人物の言動は記しても、内面にまでは踏み込まない。しかしだからこそ、読者は人物の言動から心情へと想像しながら読む必要がある。書いていないことを想像によって補いつつ読む力と態度を養うことができる教材である。

本章段の義仲と兼平は対比的に描かれている。特に最期は、郎党に討たれる義仲とすさまじい方法で自害する兼平という形で対比的である。武士の死としては兼平の死が望ましい。では、作者は義仲を残念な人と価値付けているのだろうか？ 文中に明確な評語はない。しかし、私は作者は義仲を肯定的に価値付けていると思う。巴と別れる時に、何とか巴を逃そうとする思いが語順の乱れにつながる義仲。田に沈み込んだ時に、兼平を振り返る義仲。作者はこのような義仲をしっかりと描いている。別章段で田舎侍の愚か者として描かれる義仲とは違う。少なくとも「木曾の最期」では、作者は、義仲の弱さ・優しさをしっかりと描き、肯定的にとらえていると考える。作者の義仲の価値付けについても、考えさせたいと思う。

【学習者について】

古典の授業では、古典嫌いにはならないように努めている。そのため、言語事項ばかりには

ならないように、登場人物を中心に読み、人間観を広げるような授業をしたいと思って取り組んでいる。今回も人間観を広げるような授業をしたい。

また年間を通じて、自分・自分たちで教材に問題意識を持ち、課題を設定する活動を繰り返してきた（ただし現代文のみ）。そのため、質の良し悪しは措いて、自ら課題を設定することはできるし、問題解決の過程で単元・授業を受けることには慣れてきた。授業にも能動的に取り組んでいると思う。本単元では古典作品、それも長文のものについても、学習課題を設定し、解決する授業に挑戦している。

【指導・支援について】

この数年、学習課題作りの授業に挑戦している。今年度は単元の評価段階にも学習課題作りの活動を取り入れた。今回の授業では古典作品での学習課題作りに挑戦した。そのため、従来の授業とは違って、最初から現代語訳を配布した。原文の範読の後に学習課題作りをしては、書かれていることの内容把握レベルの課題に終始してしまうと考えたからだ。（なお、学習課題は書かれている内容をより詳しく理解する課題、書かれていないことを想像することで理解を深める課題、文章を理解した上でそれをどのように活用するのか考える課題が、質の良い課題だと考えている）。学習課題づくりはワークシート（資料参考）を用いて行っている。

グループで考えたクラス全体で考えたい課題は11個ある。この11個の課題はプリントにして配布し、皆で共有している。課題1や8は「木曾の最期」を扱う多くの教師が行う発問だろう。課題10や11は、説明で済ませようと思っていたが、多くの生徒が感じる違和感なので、考えさせる時間を設けたい。課題9「義仲の武勇が語られていないのは、なぜか？」は鋭い課題。本章後半では、義仲の武勇は目立たない。他の事を優先的に描こうとして、武勇への言及は弱くなっている。

なお、各グループの作った、みんなで考えたい課題は次のようである。

【義仲について】

1「今日は鎧を重く感じる」のは、なぜか？（臆病だったからか？）

【今井四郎兼平について】

2 疲れていない（「疲れさせ給はず」と言ったのに、すぐに疲れている（疲れさせ給ひ）と言ったのは、なぜか？

3 最後に変った自害の仕方をしたのは、なぜか？

4 最後兼平は戦わず自害したのは、なぜか？

【義仲と今井四郎兼平の関係について】

5 兼平が義仲に逃げるのではなく、自殺を勧めるのは、なぜか？

6 兼平が義仲を松原に行かせようとして、義仲がそれを受け入れたのは、なぜか？

7 義仲と兼平の間柄は、どんなものか？

【文章全体について】

8 義仲と兼平の死に方の違いに込められた意味は、どのようなものか？

9 義仲の武勇が語られていないのは、なぜか？（兼平ばかりかっこよく描かれている）

【時代・社会背景について】

10 武士の恥とは何か？

11 命よりも名誉やプライドを大切にするのは、なぜか？

本時の目標

- ・ 鎧を重いと感じる義仲の心情について、これまでと比較しながら、想像する。
- ・ 義仲が死に関する考えを変えた理由について、兼平の発言を踏まえつつ、考える。
- ・ 説得する兼平の発言を、相違点（反対点）と共通点をふまえながら、整理する。
- ・ 松原へ行く義仲の心情を、想像する。

本時の指導計画

展開	学習活動	指導上の留意点
導入	・ 前時の内容と、本時の内容の確認。	・ 学習範囲の確認と、学習課題の確認を行う。本時に関する学習課題は3つ。
展開1	・ 学習範囲の範読と音読。 ・ 義仲の「日頃は～重うなつたるぞや」の発言から、義仲の心情を想像する。	・ 音読は一人読みとペア読みを行う。 ・ これまでは「真っ先にこそ進みけれ」など、動きが軽かったことを押さえる。 ・ 二騎になり追い詰められた、長時間戦っている疲れからの自信の喪失、巴が去ったことでさすがに孤独を感じるなど。
展開2	・ 義仲の死に関する考えの変化を理解し、その理由を考える。 (1) 義仲の死に関する最終的な考えと、	・ 「さらば」と松原に向かうことから、最

<p>それまでの考えを理解する。</p> <p>(2) 兼平の発言の相違点と共通点を理解する。</p> <p>(3) 義仲の死に関する考えが変化した理由を考える。</p>	<p>最終的には兼平の説得を受け入れ自害しようとしていることを押さえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・説得を受け入れる前は「ひと所でこそ討ち死にをせめ」であることを押さえる。 ・「こそ〜め」から、義仲の強い意志であることを押さえる。 <p>・兼平の二つの発言が時間差もないのに、「御身もいまだ疲れさせ給はず」「余の武者千騎と思し召せ」が「御身は疲れさせ給ひて候ふ」「続く勢は候はず」と反対になっていることを押さえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・反対ではないが、異なっている部分を押さえる。 ・一方で、一貫して自害を勧めていることを押さえる。 <p>・兼平の発言や態度、置かれた現状を踏まえるように確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「兼平の必死の説得によって、ようやく自分の選択肢が一つしかないことを自覚した」「追い詰められて頼るのが兼平しかいないので、兼平の言うことをとりあえず受け入れた」「自分の自信もないなか、兼平の絶望的状况を知らされ、完全に力を失ってしまった」など。
<p>展開3</p> <p>・「さらば」と松原に向かう義仲の心情を想像する。</p>	<p>・これまでの授業内容を踏まえて、想像する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義仲が積極的に自害しようとしているかどうかという点を踏まえるように確認する。 ・源氏第一の勇将である義仲が、むしろ弱

		い面を見せていることを説明し、それを弱いと考えるかどうかとふる（時間があれば意見を聞く）。
まとめ	・次時の内容の確認。	

本時の評価

- ・ノート記入と発言の確認による。

実践上の留意点

本実践で工夫したのは次の二つである。一つ目に、書かれていないことを想像しながら読む力の育成である。「木曾の最期」は高等学校古典の定番教材。定番たり得ている理由として、登場人物の心情を想像しながら読む授業が可能ながあげられる。本場面での人物の行動の裏にはそれぞれの細かな思いがある。しかし、登場人物の心情は必要以上に描かれていない。描かれていない思いを想像しながら読むことが、本場面を豊かに読むのであれば必要になる。二つ目に、学習課題づくりの活動を取り入れたこと。今年度は現代文の授業では学習課題づくりの活動を繰り返してきた。ただし、古典授業で学習課題づくりを行うのは初めてである。長文でもあるため、最初から現代語訳を配布し、それを私が範読した後に、学習課題づくりの活動を行った。

授業後の検討会では多くの意見をいただいた。上記2点に関わるものを中心にまとめた。

①義仲の死についての思いについて

本実践では義仲の死についての思いが、「一所で死にたい」から、「自害をする」へと変化したととらえて、授業を進めた。人物の変化をとらえることが大切だと考えたからだ。しかし、義仲の心の中では、自分の思いどおり「一所で死にたい」という思いと、兼平の勧めに従って「自害をする」という思いの葛藤がある。「さらば」と松原に駆ける義仲の心情は、「一所で死にたい」から「自害をする」へと完全に変わっているわけではない。葛藤しながら、駆けてゆく。

変化をとらえ、板書もそのようなものにしたが、葛藤する側面が弱くなってしまった。本場面を扱う場合、葛藤の側面に注目してこそ、義仲の心情を丁寧に見ることになるのではないかと考えた。

②古典の授業における学習課題作りについて

古典教材でもあり、分量もあるので、単元冒頭で現代語訳を配布し、それをもとに学習課題づくりの活動を行った。学習課題を作ることに重点を置いたからである。そのため、生徒は文章内容に関わる学習課題を多く作ることができた。

一方で、古典のまま範読を行い、それをもとに学習課題を作る方法もあり得る。現代語訳をもとにしてしまえば、原文に関する注目がどうしても弱くなってしまふ。原文をもとに学習課題を作った場合、文章表現に関わる学習課題も作ることができたのではないかと考える。

③学習課題のいかし方について

学習課題づくりの活動は次の力と態度を育成することにつながる。①問題意識を持って対象と関わる、②能動的学習、③文章を深く読む、④社会人になっても学び続ける。このように考えて、実践を行っている。

「クラス全体で考えたい課題」をまずは個人で作る、その後グループで作る。研究授業を行ったクラスでは11グループが課題を作った。授業の中で、この11個の課題を解決していく。この解決する過程は一斉授業の形態で行っている。

もう少し学習課題をいかすこともできる。学習課題づくりの授業を行って11個の課題を作った後、もう1時間をかけて、その課題を個人が解決し、考えをノートに書く活動を行うのである。そして、いったん解決したうえで、その後の一斉授業を受けるという展開である。もちろん時間数との兼ね合いもあるが、この展開であれば、より深く教材文を読めるし、自分たちの作った課題をよりいかすことにつながる。